明善同窓会関東支部　会報

発行：明善同窓会関東支部会報委員会

小惑星「Meizen」誕生

昭和53年卒　古賀之士
（明善天文部出身、明善同窓会顧問、参議院議員、天文フロンティア議連）

1993年に発見された太陽系の小惑星に、このたび母校・福岡県立明善高等学校の名を冠した小惑星「Meizen」が誕生しました。

▲命名式　上段：古賀、渡辺氏、内村会長、中島校長

世界最大の天文学組織である国際天文学連合（IAU）の正式承認を受け、2025年11月に公表。2026年2月24日には、明善高校において命名式が行われました。

この小惑星は、火星と木星の間を公転する直径約3.3キロの天体で、1993年9月、札幌市在住のアマチュア天文家・渡辺和郎さんによって発見されました。2002年に正式登録された後、長らく固有名が付けられていませんでした。渡辺さんはこれまで800個以上の小惑星を発見し、日本にゆかりのある地名や人名を国際的な正式名称として残してこられた第一人者です。

▲正門にて　渡辺氏／古賀

今回、明善高校天文部（現・地球惑星部）OBでもある私が、旧知の渡辺さんに命名をお願いしました。「母校・明善の名が星となり、現役生や同窓生の誇り、そして未来への夢につながれば」との思いからです。一気に話が進んだのは、昨年の大同窓会でした。同席の中島校長、内村同窓会長に「母校の名前を小惑星に」と、いきなりのご相談にも関わらず快諾をいただき、会場内の福岡県の寺崎教育長（昭和55年卒）からも許可を得ました。学校、同窓会各位の「明善愛」のおかげで、渡辺和郎さんに英文で「明善高校は、1783年にそのルーツがあり、地球惑星部は観望会や手作りのプラネタリウムで天文普及に務めている。また2012年日本政府よりスーパーサイエンススクールとして認められた」と申請文をメールし、国際天文学連合はその申請文を採用し、2025年11月にスピード公表してくれました。命名式当日は、渡辺さんから中島校長、内村同窓会長へ命名額が手渡され、記念講演では「いつか人類がMeizenを訪れる時代が来るかもしれない」と、未来への夢が語られました。

母校の名が宇宙に刻まれたことは、私たち同窓生にとってこの上ない誇りです。小惑星「Meizen」が、世代を超えて明善の精神と挑戦の心を伝える“星”となること を願ってやみません。

ご挨拶

関東支部会長　昭和51年卒　内田直人

同窓生の皆様には支部活動にご支援、ご協力いただき感謝申し上げます。関東支部は第40回総会を迎えることができました。第1回総会は昭和54年パレスホテルにて200名参加、川合寿人会長（中学T14、元警視総監）、中村八大氏（S25）のピアノ演奏で開催されました。その後先輩方のご尽力、ご協力で約半世紀継続されてきました。設立当時から変わらぬ使命は故郷を離れた同窓生同士が母校明善や地元久留米の情報を共有し、また活躍する同窓生を応援し、さらに上京する明善生を温かく迎えることだと思います。

2月には小惑星「Meizen」が誕生するという嬉しい知らせが届きました。在校生・卒業生が空を見上げ夢のある校名、母校を誇りに想うことを想像します。今年の総会・懇親会でも一番の話題になることと思います。若手、特に総会学年幹事を務める（47歳）前の若き年代も参加してみたい、参加してよかったと感じる同窓会活動を目指しています。若手同窓生で結成した学友会（旧学生の会）の活動も継続定着し、昨年8月の明善1年生の東京研修旅行の際にはメンバー12名が生徒相手に熱い対話会を開催しました。年代を超えたますますの交流の広がり大きくなることを期待します。

年に一度の会報に加え「関東支部メールマガジン」は第24号を重ね同窓生の幅広い活躍やイベントを1千名の仲間へ発信しています。ネット交流が増えた今も対面での再会・交流が一番です。今年の総会でも旧交を温め、久留米や明善の発展を願い、卒業生の活躍を応援する同窓会を続けたいと思います。引き続き皆様方のご支援、ご協力よろしくお願いいたします。

ご挨拶　―小惑星「Meizen」誕生―

明善同窓会会長　昭和50年卒　内村直尚

明善同窓会関東支部の皆様におかれましては、同窓会の運営にご指導・ご鞭撻をいただいておりますこと、心よりお礼申し上げます。

昨年6月8日（日）は、明善同窓会関東支部総会・懇親会に参加させていただきました。一昨年同様に、会場いっぱいに広がる熱気と活気に、あらためて同窓生の結束の強さを感じ、感激いたしました。また、昨年10月11日

（土）には、「そうだ　同窓会、行こう。」のテーマを掲げた第58回明善大同窓会を近藤大輔実行委員長始め、平成元年卒の皆様の御尽力により無事に開催いたしました。世代を超えて語り合い、互いの近況を温かく励まし合う姿は大変印象的であり、同窓会の持つ力を再認識するひとときとなりました。こうした力強い熱量が、今後ますます若い世代へと受け継がれ、同窓会の新たな歩みを支える原動力となっていくことを心より期待しております。ご多忙の中をご臨席賜りました内田関東支部会長を始め、多くの同窓会関東支部の皆様には心より御礼申し上げます。

また、皆さま既にご承知の通り、2月24日（火）に小惑星「Meizen」の命名式および講演会が明善高校において執り行われました。1993年に渡辺和郎氏により発見された火星と木星の間を回る小惑星が「Meizen」と命名されたことを受けて開催する運びとなりましたが、在校生が宇宙科学に親しむ良い契機として、ささやかながら寄与できたのではないかと受け止めております。同窓会として、これまでの活動に加えて、高校生の学びや将来の進路形成に寄与するような新たな知見や経験の機会を提示していくことも、今後の大きな役割となり得るのではないかと感じております。先輩方が培ってこられた豊かな知恵や実践が、次代を担う若い世代の視野を広げる一助となれば、同窓会の存在意義はいっそう深まることでしょう。

今後も、同窓会会長として、明善同窓会および明善高校の更なる発展に少しでも寄与出来るよう励んで参る所存です。至らない点も多々あろうかと存じますが、会長を始め同窓会関東支部の役員の皆様、会員の皆様には引き続きご支援・ご協力をお願い申し上げますと共に、皆様の御多幸と御健勝をお祈り申し上げご挨拶と致します。

ご挨拶

明善高校　前校長　中島敦雄

明善同窓会関東支部の皆様におかれましては、日頃から本校並びに本校生徒に対しましてご支援を賜り、誠にありがとうございます。心より厚くお礼申し上げます。

さて、令和7年度も明善の生徒たちは、元気で学校生活を楽しんでいます。全日制においては、毎年恒例の関東研修を8月に実施しました。その際、お忙しい中、関東同窓会の皆様には、本校1年生の生徒と同窓生との交流を支援していただき、あらためて感謝申し上げます。先輩方の話を聴き、生徒たちは、有意義な時間を過ごすことができました。また、明善同窓生のネットワークを明善の強みとして感じることができたと思います。

9月には「響き」というテーマで大運動会を実施しました。このテーマの意味は、それぞれ異なる響きが、最終的に一つになり、明善に関わる者の一人一人の心に響くという、この大運動会をとおして明善が一つに結束することを表したものです。限られた時間で、体育館が工事中で使用できず練習場所に工夫が必要でしたが、最後は、明善生が一つになった素晴らしい大運動会を創り上げました。

10月に久留米シティプラザで実施した創立記念式典では、元陸上自衛隊幕僚長の森下泰臣氏に記念講演に「未来へ向かって挑戦する君たちへ～陸上自衛官人生を振り返って～」という題でご講演いただきました。明善高校時代や自衛官としての在任中のご経験をもとに明善生に熱いメッセージをいただきました。また、生徒たちからの質問にもご丁寧に答えていただき、有意義な講演会となりました。

12月上旬に、2年生が東北と関東への修学旅行を実施しました。前半は宮城県を中心に震災学習を行い、後半は東京における自主研修と東京ディズニーランドが中心で、楽しく充実した時間を過ごすことができました。

部活動については、練習場所を工夫し、どの部活動も健闘しています。陸上部と水泳部が全国大会出場、また、文化部においては、化学部、写真部、美術部、文芸部が全国高文祭に出場しました。その他にも、多くの部活動が県大会に出場し、日頃の練習の成果を発揮しています。進学についてですが、この原稿を書いている時点では、全ての大学の結果がまだ判明していませんが、これまでの模擬試験の結果、大学入学共通テスト本番の結果等から推測して、本校に相応しい結果を収めてくれるのではないかと期待しているところです。

また、定時制の生徒たちも、生活体験発表会、文化祭、修学旅行など、学校生活と仕事を両立しながら、落ち着いて学習や学校行事に取り組んでいます。生活体験発表会では、県大会に進む生徒もおり、充実した学校生活を送っています。

3月1日には久留米シティプラザにて卒業式を行いました。今年の卒業生の中からも、関東の大学等に進む者が出てくると思いますので、その折はよろしくお願いいたします。

最後になりますが、明善同窓会関東支部のさらなる発展と会員の皆様の益々のご健勝を祈念しますとともに、引き続き、母校明善高等学校に対しまして、ご支援を賜りますようお願い申し上げまして、ご挨拶とさせていただきます。

（中島校長は3月末で退任されました）

2026年4月
大塚和弘校長が明善副校長から就任されました

明善の今

写真提供：同窓会事務局松田様

正門

通用門

新旧同窓会館

新校舎と体育館工事現場

体育館工事現場

第59回明善大同窓会のご案内

実行委員長　平成2年卒　深町伊久美

■開催概要

日　時　10月10日（土）
14時開始（13時受付開始）

場　所　久留米市
ホテルマリターレ創世 久留米

スローガン　「懐かしいだけじゃない。
今をつなぐ 物語があった。」

本年は、私たち「H2会」が当番学年として、大同窓会の準備を進めております。「懐かしいだけじゃない。今をつなぐ物語があった。」をスローガンに掲げ、これまで明善を支えてこられた先輩方の歩みを受け継ぎながら、世代を越えて〝今〟の明善を感じ、語り合える場となることを目指しています。

正直なところ、「私で務まるのだろうか」と思う場面もありますが、準備を進める中で、先輩方や同期が長年にわたり大切につないでこられた想いの重みと、その積み重ねの上に今の私たちが立っているのだということを、日々実感しています。

久留米を拠点に準備を進めておりますが、関東をはじめ全国でご活躍されている同窓生の皆さまの存在は、右往左往しながら準備を進める私たち実行委員会にとって、大きな力であり、心強い支えです。

当日は、懐かしい再会はもちろん、これからにつながる新たなご縁が生まれる一日になれば幸いです。ぜひ多くの関東支部の皆さまにもご参加いただき、母校・明善を軸としたつながりの時間をご一緒できたらうれしく思います。

第39回関東支部総会を開催

第39回総会・懇親会を昨年6月8日（日）中央大学駿河台キャンパス19階レストランで開催した。参加者はコロナ禍以降毎年増加し130名に、中島明善校長、内村明善同窓会長はじめ、同郷高校の在京同窓会からも多数出席いただいた。平成・令和卒業の若手が1/3を超え若返りと賑やかさが増した。

総会は内田会長挨拶に始まり、中島校長から進学状況や部活動の活躍、県大会最優秀賞の学校紹介ビデオ上映など母校近況を嬉しく聞かせてもらえた。総会後半、ドクターヘリ・フライト救命救急医師として活躍する本村友一氏（H8卒）による講演「救急医療の最前線と近未来」、最前線での救急救命活動に加えドクターヘリ普及拡大活動、瀕死の重傷から元気に回復した少年と再会し日本初の「ヘリポートでのキャッチボール」など、活躍ぶりを嬉しく楽しく聞かせてもらった。

懇親会は内村同窓会長の挨拶・乾杯で始まり、伊東・山本さん（S55卒）の名司会で賑やかさが一段と増し同窓生の交流が進んだ。10月開催の大同窓会幹事団（H1卒）がビデオ交えて参加を呼びかけ、甲斐あって関東から大勢参加したとのこと。若手同窓生の会（学友会）14名が登壇し自己紹介で会場を沸かせた。大抽選会では若手がくじを引き豪華協賛品を手にした同窓生が歓声をあげていた。最後はいつもの白旆の歌で締めくくり、次回も元気に再会することを誓った。

総会は支部幹事に加え若手学友会メンバーの協力で開催できた。今年の総会はH8卒が幹事団を務め、広い年代の同窓生にとって楽しく有意義な同窓会になること間違いない。

▲校歌斉唱

▲内村会長と本村氏対談

▲司会より紹介を受ける本村氏

▲学友会メンバー紹介

第58回明善大同窓会のお礼

実行委員長　平成元年卒　近藤大輔

昨年の10月11日開催の第58回明善大同窓会に対しまして、多大なるご支援とご協力を賜り誠にありがとうございました。

大同窓会当日は、暑いばかりの晴天にも恵まれ多くの明善同窓生が参加された事もあり、行き届かない面もございましたが、参加された方々の笑顔を見て大盛況であったと思っております。当番幹事H1会は、大同窓会に向けて様々な準備を行ってきましたが、参加された皆さまからの温かいお言葉で全てが報われ、かけがえのない思い出になりました。これもひとえに、歴史と伝統に裏打ちされた明善同窓生のご支援とご協力のお陰であり改めて感謝申し上げます。

これからの大同窓会を担っていく後輩達も臆することなく、明善同窓生を頼っていただければ、必ずや楽しい大同窓会に導けると信じておりますので、引き続き皆様のご支援とご協力をお願いいたします。

今後も、微力ながら明善魂を胸に明善同窓会並びに明善高校の発展のために努力してまいります。

H1会のスローガンで結びます。

「そうだ、同窓会 行こう。」

▲ご来賓を囲んで

▲応援団で白旆の歌を

関東支部総会に向けて「繋がる縁、広がる明善の輪」

総会実行委員長　平成8年卒　阪本幸司

私が関東支部の活動に加わることとなったきっかけは、ちょうど一年前のことでした。久留米在住の同級生から「関東在住の平成8年卒を探している」という連絡を受け、関東支部の役員の皆様とのご縁をいただいたことが、現在の活動へと続いております。

この一年間、現役の高校生から、自分の親以上の世代にあたる大先輩まで、実に幅広い層の方々と交流させていただく機会に恵まれました。世代を超えても変わらぬ「明善」という共通項のもと、各界で活躍される方々のお話を伺うことは、私にとって大きな刺激となっております。こうした貴重な場をいただけることに心から感謝するとともに、改めて明善高校で学び、この温かな絆の一端に居られることの喜びを深く噛み締める毎日です。掲載させていただいた写真は、この一年でお知り合いになった皆様とのひとときです。幹事会の後や学友会の集まりなど、立場や世代を超えて笑顔で集まれるこの時間は、私にとってかけがえのない財産となりました。

さて、来る6月21日（日）に開催される関東支部総会では、私たち平成8年卒が運営のリード役を担わせていただきます。最近は同期のメンバーともなかなか集まれる機会が少なくなっておりますが、この6月の会に向けて、再び団結を深めていければと願っております。

昨年の同窓会では、同級生の本村君に講演をいただきました。彼はドラマ『コード・ブルー』や『新宿野戦病院』の監修を務め、ドクターヘリの最前線で活躍しており、そのプロフェッショナルな視点からの貴重なお話は、参加した皆様からも大変好評を博しました。そして今年は、一つ下の代である平成9年卒の著名な方にご登壇いただく予定です。昨年とはまた違った視点から、皆様にお楽しみいただける会になると確信しております。

一人でも多くの同窓生の皆様、そして懐かしい同期の仲間とお会いし、明善の絆を分かち合えることを心より楽しみにしております。当日はどうぞよろしくお願い申し上げます。

▲学友会にて

▲在校生との対話会にて

▲忘年会にて

▲総会にて　H8一同

明善1年生徒の対話会を開催

昨年の猛暑8月、明善1年生約100名が2泊3日で東京研修に来た。修学旅行とは違い希望者、入学して半年も経っていないのに希望を抱えての関東の大学見学である。2日目昼間は東京大学でIT関係で著名な江崎浩教授（八女高校出身）の模擬講義を受けてきたとのこと。その後の夜の対話会となった。グループに分かれ20から50代の先輩12名と対話会を開催した。進路に対する質問、特に九州を離れての進学の不安、生活の不安を真剣に尋ね、またその後の仕事選び・会社選び熱心に聞いていた。特に久留米や九州では体験できないいろんなチャレンジ機会が待っている、挑戦できることを知ったようだ。先輩たちも生徒たちの将来に役立てばと熱く語りかけていた。実は前日の熱帯夜、ホテルの冷房機が全館故障しほとんど眠れなかったとのこと、にも関わらず目を見開き一生懸命に向き合う生徒たちの熱意はすごかった。

▲対話会の様子

理数科生向けキャリア講話

夢に近づくためにどのような選択をするか

平成31年卒　小川竜也

昨年3月に九州大学大学院生物資源環境科学府を修了し、就職上京しました。縁あって2月に母校にて在校生向けの講話の機会をいただきました。

きっかけは、昨年の関東支部総会にて偶然、恩師で現理数科主任教諭の連絡先を入手できたことでした。卒業以来の近況報告、私の歩みをお伝えしたところ、「ぜひ在校生にその経験を語ってほしい」と熱烈なご依頼をいただき実現しました。

講話では、一貫して「宇宙に行きたい」という夢を軸に進路を選んできた私の経験を、キャリア教育の一環としてお話ししました。宇宙を志しながらも、「農学部に進学する」「大学時代に連続起業する」「ワクチン開発の研究に取り組む」といった、一見すると脈絡のないように見える大胆な選択の経験を紹介しました。一番伝えたかったのは、私が日頃大切にしている、岐路に立った際のマインドセットです。「自分の選択にこだわること」、「その選択に自ら意味付けをすること」、そして「自分の選択に自信を持つこと」の三点を伝えました。

一時間弱の予定が、質疑応答が始まると生徒たちの熱気は予想を遥かに超えていました。質問の手は途切れることなく、放課後にまで及ぶ約三時間の熱い対話となりました。

寄せられた感想には、彼らの切実な葛藤と、新たな決意が綴られていました。「将来の夢がなく、何がしたいかわからないまま志望校を選んでいたが、長い目で見て今できることから情報を集め、意味付けをしていこうと思った」という声や、「『バイトではなく起業してみよう』という言葉に驚いた。失敗を恐れるのではなく、成功させるという強い精神を持ちたい」という力強い決意。また、「やりたいと思っても行動に移せなかった自分を卒業し、将来の自分のために動き続けたい」と、一歩踏み出す勇気を得た後輩もいました。

対話を通じて感じたのは、今の明善生もまた、真摯に自分と向き合い、きっかけを求めているということです。夢はあるが一歩踏み出せないでいた後輩たちにとって、私の経験が、彼らの背中を押す一助になれたのであれば、これに勝る喜びはありません。

思えばこの一年、関東支部総会を起点に、一年生の東京研修での座談会や、福岡県人会「就活を応援する会」での登壇など、若輩ながら多くの母校貢献の機会をいただきました。母校が誇る「人間力」とは、自ら課題に気付き、困難を楽天的に捉えて行動する力であると、後輩たちの輝く瞳を見て改めて実感しました。今後も、明善という深いご縁への恩返しとして、積極的に同窓会活動に関わり、次代を担う後輩たちを応援していきたいと思います。

51会同期会を開催

昭和51年卒　吉永伸一

51会を11月15日、新橋の海鮮居酒屋「ハレルヤ」で開催した。運悪く七五三の日と重なり男子13名と、近年では最少人数となった。昨年1月開催では男子15名、女子2名の参加、やや寂しい顔ぶれであったが、その分、結束はより強く感じられた。

12時開店前に多数参集、店前での待ち時間こそが同窓会の始まり。「やあ久しぶり」「どげんしとった？」と声が飛び交い、瞬く間にあの頃の空気へ。店に入り、再会を祝して乾杯、右に左にと会話が広がり、たちまち店内は賑やかな笑い声に包まれた。会場は手狭だが「膝を突き合わせて」の濃密な語らい。恒例の近況報告では、孫の成長、健康の話題、年金や定年後の暮らしぶりなど、人生の円熟を感じさせる話が続いた。参加者は少なかったものの、盛り上がりはいつも通り。もっとも3時間に及ぶ歓談は、さすがに少々身体に堪えたかも。

いくつになっても、高校時代の友は心の支えであり、変わらぬ温かさを与えてくれる存在であること実感した。

後日談として、年明けに嬉しい報が届いた。NHKの会長に同期の井上君が就任した。番組で来歴が映像とともに伝えられた。昭和55年に入局し、初任地は長崎放送局、雲仙・普賢岳の噴火を取材する姿も映し出され、その後政治部へ報道の最前線に立ち続けた歩みが語られた。同じ校舎で学んだ仲間の就任に誇りを感じた。同窓会での再会は祝杯が上がること必至である。

同窓生から思い出投稿

11回目の「1万人の第九」

昭和41年卒　井手正明

「1万人の第九」と聞くと、多くの人は昨年の大阪万博の開幕式を思い浮かべるかもしれません。しかし関西では、大阪城ホール落成記念公演から始まり40年以上続いている年末の恒例行事なのです。私が初めて参加したのは大阪勤務時代の1986年。それ以来、毎年欠かさず参加し、忘れもしない10回目の1995年を迎えました。

あの年は阪神淡路大震災が起こり開催も危ぶまれましたが、「復活」を願う声に支えられ、マーラーの「復活」（抜粋）を加えて実施が決まりました。私は被災を免れたものの、1か月前に交通事故で鎖骨を粉砕骨折し入院。参加をあきらめかけましたが奇跡的に回復し、本番直前に退院して舞台に立てました。震災と自分自身の「復活」が重なったあの瞬間の感動は今も胸に残っています。

音楽との出会いは、明善高校ブラスバンド部。1966年（S41）に卒業して大学へ進んだ後も、誕生したばかりの明善オーケストラにOBとして参加し、音楽はいつも身近にありました。しかし社会人になると、仕事に追われる日々の中で、気がつけば音楽との距離が少しずつ開いていきました。そんな私が30代半ばで再び音楽を取り戻すきっかけとなったのが、この「1万人の第九」でした。あの圧倒的な一体感は、ほかでは味わえない特別な体験でした。

▲パンフレット

しかし東京転勤を機に参加できなくなり、長い間、思い出の中の出来事になっていました。ところが10回目から30年の時を経た昨年正月、万博の開幕式で関東からも募集すると知り、迷わず応募しました。大阪万博という特別な舞台で、もう一度あの感動を味わい、11回目の「1万人の第九」に挑戦したいという思いが強く湧き上がったからです。

4月13日、開幕式の日を迎えました。朝からあいにくの雨です。万博カラーのポンチョをまといリハーサルが始まると、広大な空間に響きわたる音に気持ちが一気に高揚していきます。いよいよ本番。直前になって思いがけず陽射しが差し込み、雨よけのフードを外した瞬間、さらに気分が高まりました。その勢いのまま大空に向かって第九を歌いあげたときの感動は、それまでの室内とはまったく違う、胸の奥まで響く体験でした。

今回は、地上のオーケストラと海上の大屋根リングの合唱団が約500メートル離れた場所で演奏し、両者の音を正確に同期させるには超高速のデジタル伝送技術が欠かせませんでした。まさに大阪万博の「1万人の第九」は最先端技術の支えで初めて実現できたのです。この技術がさらに進化し、世界中のより離れた場所にいる人々と共に第九を歌える日が来れば、「Alle Menschen werden Brüder（すべての人々が兄弟になる）」というベートーヴェンの願いもきっと現実になるでしょう。

その実現に少しでも力を添えられるよう、これからも音楽と共に歩んでいきたいと思っています。

関東大周遊修学旅行

昭和42年卒　鳥越素子

先日（1／24）、TV東京「新美の巨人たち」で本郷の鳳明館が取り上げられていました。1966年の修学旅行で、42卒の明善高生はその鳳明館に泊まりました。日程表から、修学旅行の記憶をたどります。時代背景を言うと1964年に東京オリンピックが開催され、新幹線が大阪まで開通。東名高速道路はまだ出来ていないころです。（名神高速はありました）

修学旅行は3年になる前の春休みに行われ、なんと、総員460名の団体旅行でA（1、3、7、8、10、11組）とB（2、4、5、6、9組）の2班に分けられていました。

4泊7日間、2泊は列車の中での車中泊です。寝台などではなくて座席で寝るのです。座席で足を伸ばして、または床に新聞紙を敷いて！今考えるとよくあんな寝方が出来たものだと若かったからなと感心します

日程表と写真からたどってみました。

1日目、3／30 14時集合15時18分久留米駅発、鳥栖で乗換え

2日目、3／31 朝6時大阪着6時30分大阪発（東海道線）14時00分富士駅着

貸切バスで本栖湖、白糸の滝、河口湖、ホテル湖南荘、河口湖ホテル泊。

皆さん白めの長コートが流行り、制服だけでは寒いことも、何しろあっちこっちに行きましたから。

3日目、4／1 バスで御殿場、仙石原を経て芦ノ湖、湖尻、小田原経由で江の島、鎌倉鶴岡八幡宮、大仏、横浜戸塚「夢のホテル」（ドリームランドの横）泊

自由時間があってドリームランドで楽しんだ人も：跡地が今は薬科大学になって、最上階のフロアが回転していた21階建ての五重塔を模した建物はまだ健在です。

4日目、4／2 羽田空港見学、代々木体育館、靖国神社、東武日光線で日光へ、中禅寺湖、日光戦場ヶ原は雪が積もっていて、南国育ちは嬉しくて男体山をバックに雪合戦を楽しみました。中禅寺湖ホテルと、橋本ホテル泊、近年行ったとき橋本ホテル跡は駐車場になっていました。

5日目、4／3二荒神社、東照宮、神橋をめぐり、昼には東武鉄道で浅草へ

浅草観音、皇居、議事堂をめぐり本郷へ。

1丁目本郷館、5丁目の鳳明館に

S42卒の修学旅行日程表　S41年3月から4月

	発			着		
	時刻	駅、その他	備考	時刻	駅、その他	備考
3月30日（水）	14:00	学校集合				
	15:18	久留米駅	荒木発門司港行	15:27	鳥栖駅	
	15:53	鳥栖駅	9202 臨時急行			客車6輌
31日（木）				5:56	大阪駅	朝食大阪駅積込
	6:30	大阪駅	9122と列車名変更	13:49	富士駅	白糸の滝、本栖湖
	14:00	富士駅前	貸切バス	17:30	河口湖畔	ホテル湖南荘／河口湖ホテル
4月1日（金）	8:00	旅館前	貸切バス	10:30	湖尻	山中湖、御殿場、仙石原
	11:00	湖尻	海賊船	11:20	元箱根	
	12:30	元箱根	貸切バス	14:00	江の島	鵠ヶ丘、大仏、ドリームランド
	14:30	江の島	貸切バス	16:30	横浜戸塚	夢のホテル
2日（土）	7:00	旅館前	貸切バス	8:00	羽田空港	空港見学
	8:50	羽田空港	貸切バス高速道路	11:30	東武浅草	代々木屋内体育館、靖国神社
	12:00	東武浅草	東武電車	14:30	東武日光	
	15:50	東武日光駅前	貸切バス	17:30	中禅寺湖	中禅寺湖ホテル／橋本ホテル
3日（日）	7:00	旅館前	貸切バス	7:40	西参道	東照宮、陽明門眺り塩、二荒神社
	9:00	西参道	貸切バス	9:10	東武日光	神橋
	9:30	東武日光駅前	東武電車	12:00	東武浅草	浅草観音−新世界
	13:00	新世界	貸切バス	15:00	皇居前	都内見学、議事堂、記念撮影
	16:00	楠公像前	貸切バス	16:30	本郷、宿舎前	本郷館／鳳明館本館
4日（月）	7:30 8:30	旅館前	貸切バス、貸切バス	7:50 8:50	東京駅、丸の内北口	
	9:05 10:05	東京駅	新幹線こだま107A、111A		京都駅	Aコースバス出発13:00 CDEFコース出発14:00
	23:10	京都駅	9103→9207 臨時急行			客車6輌4分の3
5日（火）				13:39	鳥栖駅	朝食広島駅積込、昼食折尾駅
				13:53	久留米駅	

宿泊しました。自由時間があって散歩へ。東大構内で撮った写真とか、不二家ミュージックサロンの券が残っています。

6日目、4／4ほぼ一日自由行動でした。皆さんどんな自由行動をしたのか、引率の先生方も度胸があるなあと、それだけ生徒を信頼していたのだろうなと思います。東京で集合時間までに全員そろうかどうか、心配ではなかったのでしょうか、携帯なんかない時代です。

届け出れば別行動も可、親戚の人と食事に行ったり、数日前に先発して、2日目の富士駅で合流してもよかったそうです。

それぞれの自由行動の過ごし方は、受験を考えている大学を見に行くという人。銀座の三愛ビルのバーゲンセールに行った人、体育館のスケートに行った、大宮の親戚のところに行った、あるいはその日誰と過ごすかが大問題で、いろんなドラマもあったとか、なかったとか。

午後には列車に乗ったはずで、それが何時だったか、乗ってすぐ弁当を配ったので夕方に近かったとして、16時としても久留米着は翌日の14時ですから22時間は列車の中ということになります。

帰りの車中では一晩中トランプをしたり、歌を歌ったり。この時間が終わるのを惜しんで、ほとんど寝なかった記憶があります。

7日目、4／5鳥栖着が13時39分・乗り換えて13時53分久留米着

今、横浜に住む身になってみると、よくこんなにあちこちに行ったものだと感心します。

ほかの学年の修学旅行はどんなでしたか？平成ころはスキー旅行だったと聞いたこともありますが、皆さんの修学旅行の思い出も読んでみたいものです。

私の愛車にまつわる話

昭和43年卒　原寿雄

今から五年前の令和三年にさかのぼります。十九年間乗ったBMW318iスポーツからトヨタライズに乗り換えました。乗り換える前のBMW318iは走行距離がまだ七万キロと少なくエンジンもすこぶる快調でしたが、ハイオク仕様で燃費がリッター当たり八キロとあまりよくないこと、経年により重量税や自動車税が高くなったこと、さらにはラジエーター液漏れやオイル漏れがあるたびに高額の修理費がかかるようになったこと等々が乗り換えの理由です。

振り返れば、私は一台の車を長く乗り続けるタイプなので、これまでに所有した車はわずか四台です。自分で簡単な部品交換や修理を行うこともあり、そのたびに愛着が深まり大事に乗ってきました。

この四台の車について思い出深いエピソードをご紹介します。

○昭和四十五年（1970年）～
昭和四十七年（1972年）
ダイハツフェロー（360ccの中古の軽自動車）

明善卒業後、福岡で就職し夜間大学に通っている時、小郡の自動車学校で免許を取って初めて買った車です。購入価格は二十数万円と記憶しています。当時、給料が二万円だった私にとっては大きな出費でしたが、初めて自分の車を手にした時の感動と興奮は今でも鮮明に覚えています。二年間乗り東京転勤を機に売却しました。

○昭和五十六年（1981年）～
昭和六十二年（1987年）
トヨタスターレット（1300cc）

結婚して子供が生まれたので移動用に運転しやすいオートマティックの二ドアを購入しました。当時小さい車でオートマティックはスターレットだけでしたので迷わずこの車に決めました。久留米への里帰りもこの車で二度経験しました。当時の中国自動車道は広島県の三次までしか開通していませんでしたので、そこから先は一般道に下り、山陰の浜田、益田、津和野を経て山口、下関と進み九州に入りました。往復2400キロの運転は記憶に残る思い出です。

○昭和六十二年（1987年）～
平成十三年（2001年）
BMW318i（1700cc）

ロンドンに赴任した際、通勤に使用するためと土曜日に娘を日本人学校補習校へ送迎するために購入した車です。免税で購入したので確か日本円換算で二百五十万円くらいだったと記憶しています。この車を運転したのは、イギリス国内だけではありません。フェリーでドーバー海峡を渡り、イギリスとは異なる風景や道路標識、右側通行に緊張しながら運転したこともあります。最初はベルギーのみでしたが、二回目はフランス、ドイツ、オーストリアにも足を延ばし、ドイツのアウトバーンでは時速百九十キロまで出して走りました。平成二年（1990年）帰国する際に、思い出の詰まった車なので一緒に持ち帰りました。その後、大きな故障もなくイギリスの三年間と合わせて十四年間乗り続けました。

○平成十三年（2001年）～
令和二年（2020年）
BMW318iスポーツ（1900cc）

前の車が調子よく走ってくれたので同じ車種を購入しました。スタイルが洗練されていたこととタイヤのホイール径が十七インチ、幅が245㎜で迫力があったことも購入理由の一つでした。

さて、今回購入したトヨタライズですが、1000ccながらターボが付いているのできびきびと走ってくれます。また、十九年間乗っていた車と比べると非常にIT化が進んでいることに驚きました。車を受けとった時点から浦島太郎状態です。ハンドル周りにいくつものスイッチ類があり、それをどう使ったらいいのか全く分かりません。パニック状態とはこういうことをいうのでしょう。衝突回避支援システムや車線を外れると自動的にハンドルを戻してくれるレーンキープコントロール等の安全性に配慮した機能、スマートフォンをハンドルスイッチで操作できる機能、前後左右四つのカメラによるフロント・サイド・バックの各モニターや車の動きを俯瞰できるパノラミックビューモニター、さらには車庫入れの際ハンドルを自動操作してくれる機能等々今まで使ったことがないものばかりでし

た。使いこなせるようになるまでに、かなりの時間を要したのは言うまでもありません。

私は今年一月、七十六歳になりました。若い時に比べ運動能力や認知能力が落ちているのは間違いありません。これからいつまで運転できるかわかりませんが、無理をせず安全運転を心がけ愛車と付き合っていきたいと思っています。

「タモリレガッタ」

昭和45年卒　豊島健次

皆様は、タモリレガッタヨットレースというのが有ったのをご存じでしょうか。

タモリさんが主催され、２０１８年までの十年間は主にＹＢＭ（横浜ベイサイドマリーナ）で行われていたクルーザーヨットのレースです。私のグループはこのレースに五回参戦しました。そのうち二回は、私が艇長（スキッパー）として舵を取りました。スキッパーは風を読み、帆（セール）の張り方、微調整（トリムと言います。）を各クルーに指示し他艇との位置関係を考慮して進路を決定します。戦果は後述しますが、レースの成否はスキッパーの腕に大きくかかっています。

まあ、このレースの主催はタモリさんで遊び心満載です。ドレスコードはサングラスです。（そんな物がヨットレースに有るとは思いませんが）

私のヨットは、当時四人で所有していたヤマハのマイレディーという二十五フィート（約八メートル）のクルーザーで、私たちは「快速艇」と称していましたが、ヨット仲間からは「怪ソクテー」と揶揄されていました。しかしそんなことは気にせず、タモリさんの箴言（？）「シゴトはテキトー、アソビはシンケン」を合言葉に、テキトーに頑張りました。この文脈はおかしい（現国は赤点でした。）けど、結局はこうなるのです。

レースの成績、そんなことは覚えていませんが、唯一思い出せるのはブービー賞を取ったことです。私たちの艇はあくまでも遊び、飲酒禁止のスキッパー以外は全クルービール三昧でした。余談ですが、私たちの艇は法律上海岸から二十海里以内の水域しか航行できない「沿海限定」です。これをヤツラはどうはきちがえたか「宴会限定」にしてしまいました。もっともスキッパーをしない時のレースでは、私もヤツラになりました。

しかし、レースの後半に入り、ＤＮＦ（Did Not Finished といって規定時間内にゴールできないで失格）とドベだけは回避したい思いで、全クルーのトリムや体重移動を適切に行い、あの船にだけは負けるなと言いながらゴールしてＢＢの栄冠を勝ち取りました。

ところが、２０１８年のレースを最後に、このタモリレガッタはヨット乗りに惜しまれながら終わりました。十年間毎回二百艇近くのヨットが参戦し、この規模のレガッタで事故が一件もなかったことはまさに奇跡だとタモリさんが言っていたそうです。またスポンサー集めも大変だったらしく、「もういいだろう」となったようです。

その後、私はホームポート（母港）を三浦半島の先っちょの諸磯マリーナに移して、フランス人設計のバンドフェットというヨットを友人と二人で所有しています。こちらは横浜ベイサイドマリーナという都会のヨットハーバーと違い、湾口が相模湾に面しており出航すると目前に富士山を望みます。漁船や本船も少なく、のんびりセイリングを楽しめます。

ヨットは究極のエコスポーツです。入出航時以外はすべて風まかせというか、風を読みマザーネイチャーと対話するのです。

私は明善三年生のとき、船乗りを目指して商船大学を受験し、失敗しました。今はヨット乗りになって海と親しんでいます。

ヨットに乗っていて一度、嬉しくさわやかな気分を味わったことがあります。それは、東京湾浦賀水道の外、つまり公海上で本船と行き合った時です。その時、私のヨットと本船の進路はコリージョンコースといって、そのまま両船が進めば衝突するのです。海上衝突予防法という国際法に基づけば、帆船に進路権があり本船が私たちを避けなければなりません。でもそんなことはいってられません。何万トンもある鋼鉄にぶつかろうものなら、こちらは粉々になるのがおちです。「スターボード」と声を発して（右に転舵するということをクルー全員に伝えるかけ声）舵を切ろうとしたまさにその時、本船が大きく転舵して私たちの船を避けてくれました。私は思わず「サンキューキャプテン」とつぶやきました。あたりまえのシーマンシップですが、さわやかな気持ちになりました。私が商船大学に進み本船のキャプテンになっていたら、彼のキャプテンと同じ操船をしたと思いました。

素晴らしいシーマンシップ！

まだまだヨット乗りはやめられません。

▲愛艇「ALIZE（アリーゼ）」

明善高校管弦楽部は今の私の原点

昭和45年卒　草場伸也

私が明善高校に入学したのは昭和42年。部活は中学から続けてきた吹奏楽部に入部し、担当は金管楽器のユーホニューム。2年進級からは部長として活動しました。当時、弦楽愛好会があり、顧問の先生には吹奏楽部と弦楽愛好会を一つにして管弦楽部にしたいとの長年の夢があることを知りました。そして先輩たちからも、管弦楽の素晴らしさも教えていただきました。偶然にも弦楽愛好会の部長になった岩渕君とは1年4組の同級生で意気投合していて、話し合いを重ねました。約半数の吹奏楽部の部員が退部して大変つらい面もありましたが、管弦楽の素晴らしさを求めて合併しました。

私は管弦楽にユーホニュームはないので、前から関心があったフルートに変更することにしました。そして先生・先輩たちの支援を受けて、2年夏に第一回の定期演奏会を石橋文化ホールで開催することができました。それからは、部の運営、学生指揮、新入生の指導、

フルートの練習と目の回る忙しさでしたが、演奏会では望外の喜びをかみしめました。

卒業後は鹿児島大学に進学し、そこでも管弦楽部に入部。3年の時には学生指揮を務め、ベートーベンの「第九」でフルートも演奏でき、感激しました。

そして、ブリヂストンに入社すると、大学4年だった明善高校管弦楽部1年後輩の増岡君が訪ねてくれて、「横浜交響楽団」というアマチュアオーケストラの入団を勧めてくれました。当時、年12回の定期演奏会を開催していて入団にはかなりの覚悟が必要でしたが、翌年に我慢できずに横浜交響楽団を訪ね、入団を許可していただきました。それから、今年で51年、途中転勤等で数年休団しましたが、現在も活動中です。年8回の演奏会には高校時代の先輩、仲間がいつも励ましにきてくれて、大いに勇気づけられています。

退職後もフルート演奏を続けて楽しい日々を送れているすべての原点は明善高校にあると、いつも感謝の念でいっぱいです。そして現在の明善高校オーケストラ部は素晴らしく成長していて頼もしく、誇りに思い、陰ながら応援しています。

▲横浜交響楽団恒例12月「第九」演奏会

古き良きアメリカ

昭和48年卒　津福一成

今年2026年はアメリカ建国250周年の年です。私は大学3年終了度1年間休学し1976年（独立200周年）の年にアメリカに遊学しました。

最初の2ヶ月はロサンゼルスを出発し、グレイハウンドバスでアメリカ・カナダを旅しました。夜間にバスで移動し、昼は都市などを観光し、3日に1度安い宿に泊まるペースで。フロリダの田舎に大学があり、少し歩いてみようと下車。校舎にビリーヤードなどもあり日本と違うなと思いながら、学生に話しかけてみました。色々片言の英語で話していると、今晩家で一緒に食事をしないかと招待され、家族と一緒に食事をいただきました。その後、彼がパーティをしようと友人に「おもしろい日本人がいる」と連絡し、友人宅に5～6人男女が集まりました。そこではマリファナパーティが行われ、楽しい時間でした。私は22時位のバスで移動しようと思っていたので、みんなでバス停まで見送りに来てくれたのですが、田舎のバス停なので建物のドアが閉まっています。私は中のコインロッカーにバックパックを入れており、取り出せない状況で、誰かがパーティのやり直しをしようと言い出し、そのまま遅くまで騒いでいました。翌日は参加していた女子学生が町を案内してくれ、昼過ぎのバスで移動しました。たまたまま、大学で話しかけただけなのに、みなとてもフレンドリーでした。

1ヵ月位してミルウォーキーに着き、これからカナダに入るのでダウンコートを購入することにしました。時間はあるけどお金がないので、いくつかのお店に行き、値引き交渉しました。

最後に手ごろな値段のお店で購入することにしましたが、店員のおじさんに良かったら今晩家で食事をしないかを誘われ、お店が終わる時間にまた戻ってきました。

彼はバスで通勤しており、どんな家族かバスで聞くと、奥さんも子供もなく、男性の友人と一緒に住んでいるとのこと。それまでの経験で、アメリカ人から話しかけられた時は、全員ホモだったので、これはまずいと思い、どの道を曲がったかなど真剣に記憶し、いつでもダウンタウンに戻れる準備をしていました。しかし、まずはお家に伺いに行くと、やはり50～60歳の友人がいました。でも二人ともとてもいい人で、その晩食事をご馳走になり泊めてもらいました。

二人からは子供のように可愛いがられ、3泊お世話になりました。しかし、旅を続けようと思いお別れの時にはスペイン語で「アスタ・ラ・ビスタ　バヤ・コン・ディオス」（また会う時まで 神と共にゆかんことを）と涙を浮かべて言ってくれました。その後、2ヶ月の旅を終え、お金が無くなりロス近郊で6ヶ月ハウスクリーニングの仕事をしました。その時たまたま連絡があり、まだアメリアにいるなら、ぜひまた家に来てほしいといってくれ、2ヶ月間ホームステイをさせてもらいました。

▲1976年5月カナディアンロッキー・ジャスパーにて

その後2ヶ月はカレッジの学生をして1年の遊学を終えたのですが、各地でとても親切で素敵なアメリカ人に出逢うことができました。

現在、国を二分しお互いを受け入れないアメリカがとても残念です。ぜひ建国250周年を迎え、「誰でもアメリカンドリーム」を夢見られる、世界が憧れるアメリカに再起してほしいと願っています。

明善の風に育まれ、国防の道を歩んだ四十載

昭和56年卒　権藤　三千蔵

「あの人は誰？」――還暦の大同窓会でそんな声が漏れたのも無理はありません。明善卒業後、防衛大学校に進み25回の引っ越しをし、私は長らく名簿上の「行方不明者」になっていました。旧友とのふとした再会を機に、関東支部の集いに加わるようになり、その友人から「寄稿せよ」との命を受けペンを取りました。

私は陸上自衛官として、大きく三つの分野を歩んできました。先ずは、部隊の「指揮官」です。仙台、豊川、千歳等の各地で、時には千人規模の組織を預かる長として、現場の最前線で隊員と共に汗を流し我が国の抑止力の一端を直接担うことができたと思っています。

次に装備品の研究開発に携わる「行政官」です。我が国防衛産業の英知及び伝統の職人技を結集し、装備品の評価や年間数百億円の予算の獲得・執行に奔走する技術者であり公務員としての仕事です。気づけば、現在の陸上自衛隊のほとんどの装備品の開発・導入に

携わってきました。また東日本大震災では、陸幕開発課長として各種資材の導入に携わり、特に原発事故の過酷な環境下で活動する隊員の安全を支えることができたことは私の誇りです。

最後は、防衛駐在官という「外交官」です。3年間でしたが、北欧スウェーデンで一国を代表する外交官の一人として各国武官と絆を深めました。偶然にも同じ公館の外務省職員に明善卒業生がいたこと驚きでした。意外にも久留米弁のイントネーションが感情を表現しやすいのか、海外では意思を伝えるのに久留米弁を使った方が役立ったのは面白い発見でした。

指揮官、行政官、外交官、三つの分野を渡り歩き感じたのは、明善で刻まれた「克己・盡力・楽天」の精神です。この校訓が、自衛官としての四十載を支えてくれたものの一つであることは間違いないように思います。行方不明から帰還した私も、近所の同窓生とプチ明善グループを結成し、飲み会や山登りをしています。同窓会にもできる限り顔を出し、これからも明善で育んだ精神を活かして、ゆっくりとにはなりますが歩みを進めて行きたいと思います。

▲日本大使公邸での天皇誕生日レセプション
（スウェーデン国防最高司令官と各国武官、最前列右端が筆者）

65歳特集
ー実質定年世代を迎えてー

青天の霹靂

昭和54年卒　雨森和広

それは正しく青天の霹靂でした。就職後、システム職として国内の工場を回っていましたが、二〇一七年に岡山単身赴任から復帰した一年後、「あと二年で定年（当時）だからのんびり仕事がしたいなあ…」と不届き来なことを思っていた矢先に事件が起こりました。

四月中旬の金曜の朝、突然上司から「今日午後（！）に五月一日付の異動の発表がある。五月と言わず来週から資源事業部に行って。」と。そして連休明けにはもうチリ行きの機上の人となっていました。弊社メインで投資していた鉱山開発で生産量が一向に上がらなかったため緊急招集がかかり、操業システムの改善のために投入されたという訳です。

▲キャンプ全景

アンデス山脈を眺めつつ二四時間のフライトでサンティアゴに到着するとすぐに指定病院で「高地検診」を受けます。鉱山はアンデス山脈の標高四千米以上で操業している為、チリにおける規制で特別な検診が必要となるのです（三千米以上が規制対象）。

ここでOKを貰うと空路九〇分のコピアポまで飛び、更に三時間の専用バス移動で漸く二千米のキャンプ到着。翌朝、キャンプのクリニックで最終検診を受けて漸く四千米の現場事務所に行くことが許可されます。女医さんから「あなたは鉱山向き」と太鼓判を押されましたが流石に酸素が薄く、普段の自分のペースで歩くと息苦しくなります（実際、倒れて救急搬送される出張者もいます）。

現場では日本人・チリ人スタッフとプロセスの改善打ち合わせを毎日一〇時間以上やりますが、片道一時間のキャンプとの移動を月ー木繰り返して週末サンティアゴに戻るという生活が一クールとなります。一回の出張で一、二クールの滞在となりますが、約三か月毎に「現地調査～日本で対策検討～現地調整と次の改善打合せ」を繰り返しました。

操業改善以外の施策や事業環境の改善もあり、一年後には単年度の黒字化を達成。更にこれから新技術も投入しようと意気込んでいたところ、五回目の訪智初日にサンティアゴで暴動が発生し緊急帰国、その後のコロナ禍でリモート会議での対応となってしまいました。

操業成績も当初予定を上回るペースで上がり、買収の話が来るくらいの鉱山になったので「最後のお勤め」は任務を全うできたのではないかと思っている次第です。

▲打ち合わせの様子

▲鉱山ダンプ
（JR久留米駅前展示のタイヤを履いています）

転がる石として六十五年を生きて

昭和54年卒　大久保勉

「A rolling stone gathers no moss.」――明善時代、この諺が心に深く刺さった。英米で意味が正反対のこの言葉、終身雇用でキャリアを積むか、変化に飛び込み続けて錆びつかない自分を選ぶか。代々続く農家の次男坊の血気盛んであった当時の選択は、当然後者。

大学卒業後、東京銀行に入行し、国際金融の世界へ。しかし胸には政治家への志があり、ニューヨークでモルガン・スタンレー証券に転職し、経済的基盤と実務経験を積みながら参議院議員への道を切り拓いた。その後は久留米市長として郷里の舵取りも担い、まさに十年単位で石が転がるように邦銀・外資・国政・市政と舞台を変え続けた半生である。

政治家として歩んだ歳月では、明善の先輩・同級生、後輩達に幾度となく支えていただいた。また古賀一成元衆議院議員、泉信也元参議院議員のご指導を胸に刻み、古賀之士参議院議員へとバトンをつないだことは郷土と明善への恩返しができた気がして、誠に嬉しい。

だが政治家も二十年近くなると転がる石に苔が生え始める。久留米市長を一期で退任し、六十代にして再び石を転がす決断をした。明善の先輩である内村直尚睡眠学会会長と組んだ国会での睡眠議連活動、久留米へのスタートアップ企業誘致と支援、そして出身大学の学生たちとの金融・投資勉強会――。勉強会では生成AIを株式投資に活用し、高度な金融分析や海外経済ニュースの読み解きを学生と共に実践している。六十五歳が二十歳と肩を並べて最先端のツールを使いこなす日々

は、老体に鞭打つどころか、むしろ心が躍る。

思えば「克己・尽力・楽天」。明善の校訓は米国流の諺と見事に重なる。絶えず新しい社会的ニーズやビジネスチャンスに立ち向かうアニマルスピリッツを次の世代へ伝えることが、今の私の使命だと信じている。転がる石は、六十五歳になってもまだ転がり続ける。

65年を振り返り

昭和54年卒　豊福和弘

4年前に39年の社会人生活に終止符を打ち、久留米の我家で愛猫と2人？で時間や制約の無いストレスフリーな気ままな生活を過ごし65歳を迎えました。

高校卒業後、鹿児島での大学生活（共通一次一期生）を経て就職で上京、社会人人生がスタートしました。ちなみにこの年にディズニーランドが開業。5年間の東京生活で結婚し第一子誕生の後、9年ぶりに久留米に戻り住居購入、第二子誕生と平凡で平穏な日々を送っていましたが、40歳の年に東京営業所転勤を命じられ、サラリーマンの宿命と受け入れて抵抗する中学生の息子を説き伏せ家族帯同で上京、練馬の石神井公園の近くに居を構え2度目の東京生活が始まりました。余談ですがこの年にディズニーシーが開業。この東京在住時に関東支部総会の年代幹事を務めた事で、多くの先輩・後輩の皆さんとのご縁ができた事は貴重な経験であり財産となり、今でも関東支部総会参加に皆さん快く迎えて頂ける事に感謝です。東京在住15年目の春、下の娘も無事大学卒業を迎えほっとしたのも束の間、突然の辞令で子供達を東京に残し、ひとり帰福し退職までの期間本社勤務、現在に至ります。

大学の農学部で農産加工関係を専攻したこともあり、食品（飲料や缶詰等）加工関係の職種に就き製造工程管理や品質管理業務に携わっていましたが、30歳の時営業部へ異動し定年まで営業一筋でした。

福岡県の農産物、特に園芸作物（果実や野菜）は昔も今も盛んで、特に筍や温州みかんは結構な生産量でした。よってB級品（規格外品）も相当量発生したこともあり、それを加工処理する工場も数多く存在していました。筍においては県内だけでも20以上の加工場があり、18ℓ缶詰にして全国の青果市場を通じ日本各地に販売、一時は国内トップシェア、販売価格も福岡県が実質決定していました。みかん缶詰も主要産地の八女や山川地区にいくつもの加工場が操業していましたが、従業員の高齢化や人件費の高騰等で中国に生産拠点が移り今は見る影もなくなってしまいました。

本来飲料事業が主体であったので、主業務は様々な飲料メーカーとの交渉に多くの時間を割いていました。ご存じの多くの飲料メーカーの製品は、自社工場生産と委託工場生産があり、生産拠点や販売エリア等を考慮され生産工場が決定されています。例えば、販売したいエリアに生産拠点を持たないメーカーは、そのエリアにある委託工場に生産依頼し販売展開します。この委託生産の受注の継続や受託数及び品目の拡大が主な商談でした。

さて、東京に置いてきた子供達もそれぞれに家庭を持ち孫も4人となりました。今は孫達に会うのが一番の楽しみとなっています。特に娘家族が江戸川区に住居を構えており、ディズニーリゾートに近く年数回孫達と楽しんでいます。上京と開業のタイミングには何か縁を感じる思いです。54年卒のねずみ年でした。

関東支部ゴルフコンペ開催する

恒例の関東支部ゴルフコンペを今年も春・秋開催した。平日の開催にも関わらず現役組も多数参加し、また天気にも恵まれ好プレーと世代間交流を楽しめた。

●第 29 回大会　2025 年 5 月 23 日（金）

坂東ゴルフクラブ、5 組 19 名
勤務地大阪から遠征参加した持松選手が見事初優勝

順位	氏名（卒業年）	（グロス、HD）	ネット
優勝	持松明弘（H23）	（85、11）	66
準優勝	内田直人（S51）	（89、21）	68
第 3 位	小柳人之（H23）	（84、15）	69

●第 30 回大会　2025 年 10 月 30 日（木）

大宮ゴルフコース、4 組 15 名
小柳、江口選手がネット 77 同スコアであったが、低ハンディの最若手の小柳選手が 2 回目で初優勝。
30 回記念大会で通常より豪華な商品を獲得。

順位	氏名（卒業年）	（グロス、HD）	ネット
優勝	小柳人之（H23）	（88、11）	77
準優勝	江口和條（S44）	（97、20）	77
第 3 位	原口勝弘（S55）	（91、12）	79

今年も 5 月 15 日（金）、10 月 16 日（金）（第 3 金曜）を予定。
若い方々の奮っての参加をお待ちします。

大熱戦！第15回秋明交流戦

第15回明善・秋田高校野球部交流戦は、11月9日（日）に前日からの雨模様の中12時～14時の曇り予報に望みを賭け開催、今年も元気に東大野球場に元球児たちが集合した。

今年は国学院大2年生の小島（R6）が加わり戦力アップと思いきや、昨年活躍した若手メンバーの欠席が相次ぎ、坂田、笛田（H25）、小柳（H23）それ以降50歳代、牛島（H3）菅谷（S63）立山、津留、久光、久保田（S62）佐々木（S61）友池（S51）と昭和戦士総動員。

さて小雨覚悟の天気もなんと奇跡的に快晴となり「これは吉兆！」

先攻は秋田高校。明善は左腕笛田と捕手坂田の同期バッテリー。初回四球と3安打を許し3点を、2回にも1点失い苦しい立ち上がり。

シーソーゲームで行きたい明善は初回小島、笛田のヒットで出塁もダブルプレーで無得点。その後も菅谷のヒット、久光のあわやホームランかという2塁打、と見せ場は作るものの3回まで4対0と厳しい展開。

反撃の狼煙は4回裏、坂田の出塁を皮切りに、小柳、牛島、菅谷の連続タイムリーで3点をあげ4対3と追い上げ開始。

その後、先発笛田が安定したピッチングを見せるものの、やはり敵は本能寺にあり、エラーが絡み5、6、7回で5点を失う。

くらいつきたい明善は5回裏、立山、津留の連続ヒットでチャンスメイクも本日2度目のダブルプレー。6回裏には小島のヒット、笛田の3塁打、小柳のタイムリーで9対6と3点ビハインドで7回最後の攻撃に。ここから昭和の粘り、久保田のヒット、津留、久光の四死球、佐々木のタイムリー、関東支部会長友池のタイムリーと3点追加で9対8に。あと1本が届かずここで無念のゲームセット。これにて2勝12敗1分け。

試合後の懇親会はノーサイドで健闘を讃え合い、応援歌を歌い合い最高の宴となった。やっぱり野球はおもしろいし、酒は最高にうまいもんです。

秋田高校視察　―第15回秋明交流戦を記念―

秋明交流戦の第15回を記念して明善球児が秋田に乗り込み交流戦を行うとの提案が前回の延長戦（懇親会）でなされた。多くが現役社会人で都合つかず断念、老球児5名で秋田高校視察となった。諫山（S33）別府（S41）江頭（S44）友池・内田（S51）が訪れた。

10月19日から2泊3日で秋田県訪問。20日（月）に秋田市中心部北から約2㎞の高台、秋田高校を訪問。野球部合宿所「天上館」にて、秋田OB小玉さん、佐々木さんが出迎えてくれ、また試験中にもかかわらず主将、副主将、マネージャーたちが合宿所を案内、意見交換をした。合宿所は甲子園出場を記念し建てられ、数々の優勝賞状・盾や甲子園でも写真が飾られていた。夜は野球部矢留会（OB会）の首脳陣交えての懇親会、秋田銘酒、名物料理で野球談義が賑やかに行われたことは言うまでもない。今度第20回？秋田が久留米・明善を訪問するとの発言がなされたようであったが、みな記憶が曖昧だった。

当時秋田県内に熊の出没が相次ぎ大騒ぎ、直後には市街中心の千秋公園、さらには秋田高校敷地内にも出没、爆竹で追い払ったとのこと。県内観光中の視察団の前には現れなかった。

▲合宿所「天上館」にて

編集後記

第40回記念総会開催、初回以来ほぼ半世紀この間進学・就職・そしてリタイアと多くの思い出が語られた。今年は小惑星「Meizen」が誕生したことが一番の話題、夜空を見上げて「明善」を思い出すことになるはず。明善先輩と明善生と対話・講話交流も多くあり同窓会の意義を感じた。寄稿では合唱団や交響楽団で長く音楽を通じて活躍する様子、ヨット・愛車と乗り物を楽しむ話題、米国遊学、北欧駐在の思い出と話題は尽きません。高齢者入りの65歳、久留米・東京・NYK・チリと世界を駆け巡り活躍の様子を垣間見た。これからも同窓生の元気な活動を伝えていきたい。

■連絡先
243-0806　厚木市下依知2-13-22　古賀方
明善同窓会関東支部事務局
Mail : meizen.dosokai.kanto@gmail.com

▼メール　▼ホームページ　▼会報バックナンバー

https://meizen.tokyo/